

418
51



始



418
51

古今法之巻

第一輯



千種の色(第一輯)附録

大正七年十月頒布

◎本書は全部完成の曉、それ／＼分類に従ひて装幀すべきものなるを以て、今は假綴の體によりて頒布する事とせり。

◎本集印刷に當りてより天候殆んど陰雨を續けて寫眞製版に意外の時日を費し漸く今日に遅れたるは深く遺憾とする所なり。

◎目次として挿めるは、これを切りて各圖版に添附するの便宜に供さんが爲めなり。完成まで其まゝになし置かるゝ方散逸の憂渺なるべし。



千種之色

大正
7. 11. 22
購求



以
去
六

荒
磯

針
屋

俵
屋

花
兔
大文

花
兔
小文

宗和好鶴丸

利久綴子

笹蔓綴子

國司漢東

國司漢東

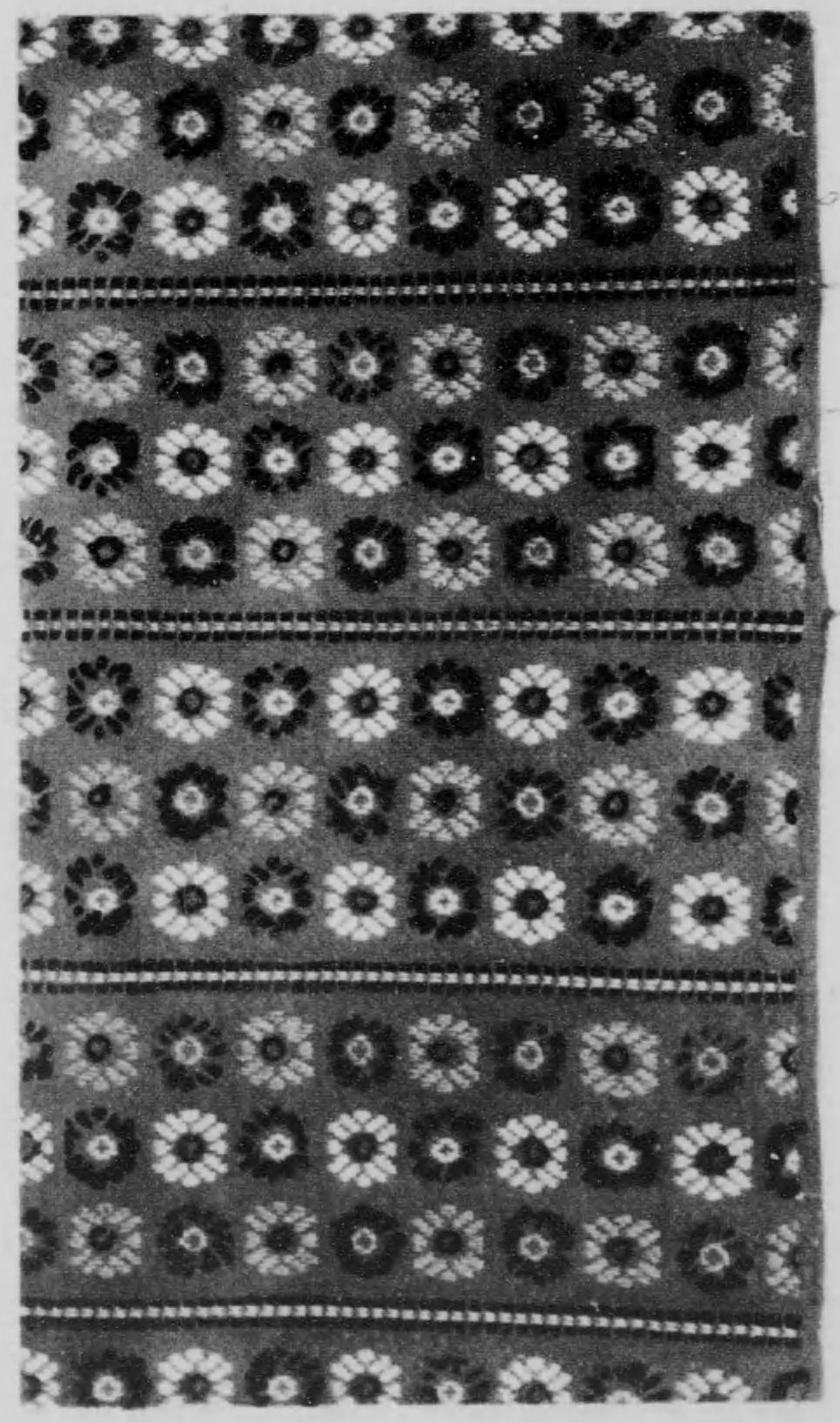
紋
海
絹

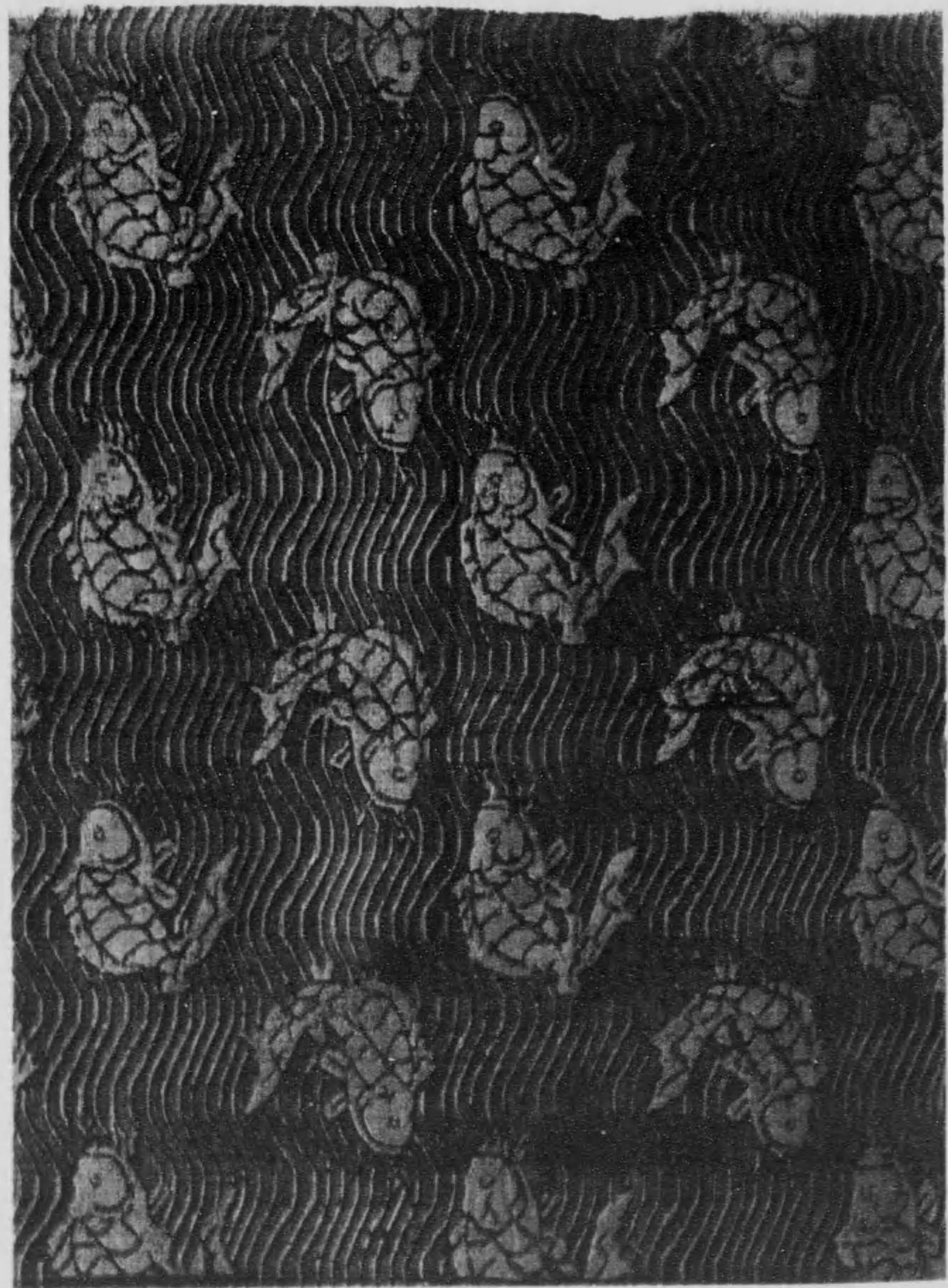


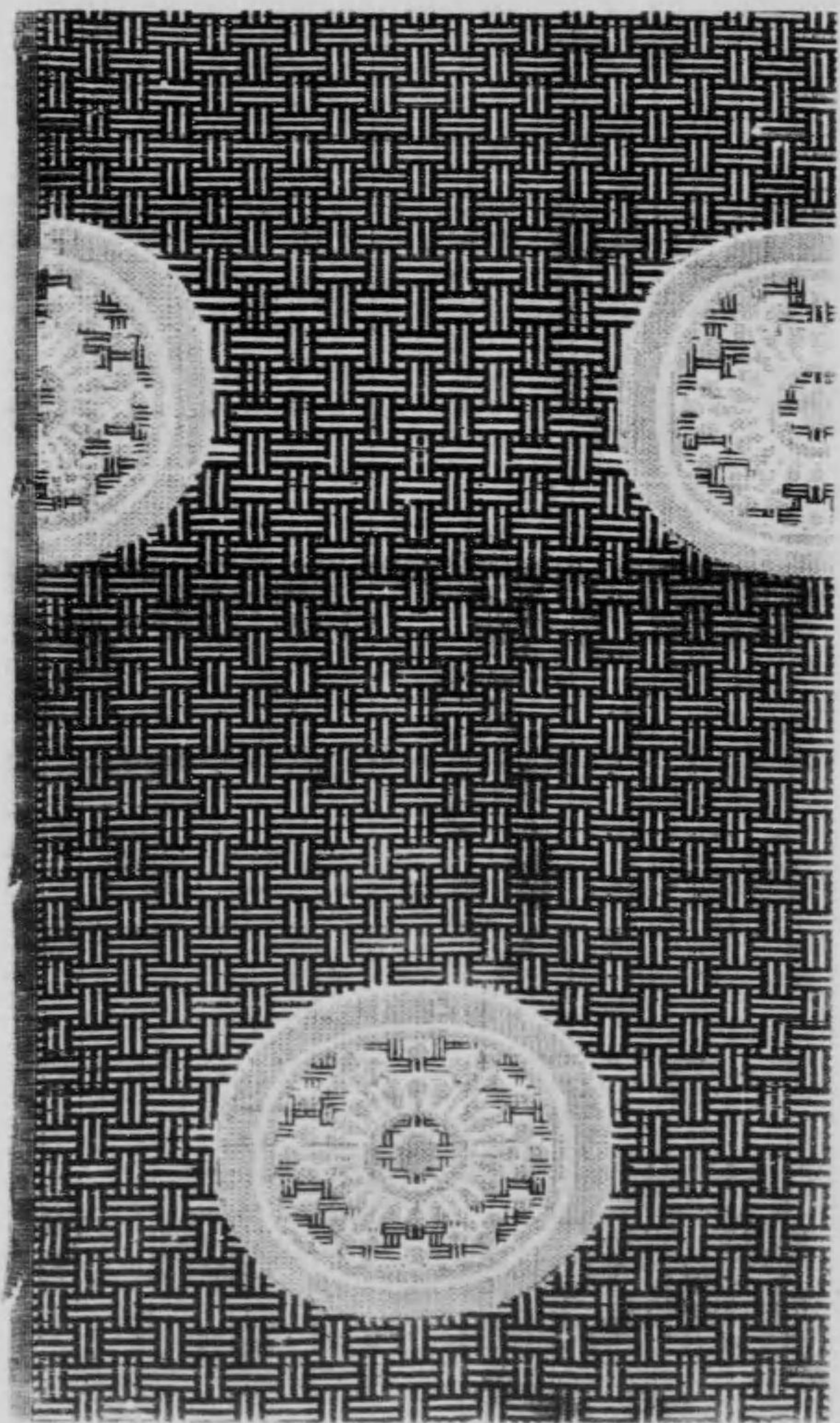
往古阿夜毗登來朝して吾國に錦綾機織の術を傳へてより以未續て
 手才伎の果國により逐次其技を造め奈良朝桃文師の諸國汎造以後
 は綾羅製織に堪ゆるもの終に二十余國の多敷を莫し次で延曆延喜に
 は織部司設置及び詰國朝貢ありその繁殖究ふべしと至再未戰亂の爲
 に漸く機々振はざるに至りぬ。下々室町幕府對外貿易の繁興につれ
 此處の港に齋す幾多珍貴の錦縞は吾國人の窺も愛玩稱揚する所とより
 習得したる結果致して漢人渡後許多の発達を遂げたる絢祭の技術を
 於て唐物にも劣らざる成果を得るに至れり。吾國機織に功猷せざるふき
 を思ふに已に唐宋文藝隆盛の時より績て未船載せしもの今日に至り
 於て冠服帳帷に重要せざるの外更に尊重保蔵するもの少く故を以
 て尊余高み貴余深ありしが爲なる事論するふし。然れども廣く範圍
 に亘り尤も賞玩尊崇に値せしは室町時代の舶輸品を以て寔たるもの
 とせん蓋し後世所謂裂額の數奇は寛永鎖國以後に益盛んとふりしに
 徴し一は當時舶輸品の盛大に因り更に加之茶道數奇の道隆盛の影
 響により嗜好は貴賤共に何れの階級にも擴充されしを得たる断片は蒐
 めて手鑑と作り單に裂の好者をして酔遊せしめんとす。標準以外之を
 裂の名稱を判定するの標準以外之を座右に供し

て彼等の慰樂の一とせり。思ふに右は一般に於る裂類賞玩の経路と
 せんり、此所に茶道數奇者の之に對する態度は更に深長有情のもの
 存するあり、鎖國以來次第に減少し希覓とふるを慨き裂を用いて各好
 める茶器の修履或は好みを表装とす時代と共に湮滅せんとする
 名物の保存鑑賞を茶趣味の下に確通に實行し来りし多くの茶器が
 戦國亂離の間流傳して幾多の歴史傳説を生み出したるが如く此等
 裂の類も出所變遷に於て單に全欄銀子錦紋の類別の外更に幾多の歴
 史傳説的有情の名別を有するに至り、愈微妙の味と變化とを含蓄する
 事とはふりぬ。此に於て手鑑は益新たふる趣味を加へ来り、其内容の
 豊富良材ふるに從ひ、益珍貴希有とふりしを以て、近年に至りては容易
 に之を坊間に見え、能く珍貴希有と事久し、然に今回千種屋平瀨一
 來の名物裂を基礎とし、不足の分は諸家に秘藏の名品を求め、殆ど原
 物と異らざる程度に最良の技術を以て版冊の手鑑を梓行せんとす。從
 来織文圖鑑十八冊物名物記名物経緯等を以て版冊の手鑑を梓行せん
 行は、従来も今日よりせば元より言ふに足らず、今此不版色刷手鑑の刊
 美術工藝上の研究資料たるは言を俟たず、數奇の上よりして之こそ
 伴侶たるを失はず、實に吾人同志の衷心忻喜に堪えざる所ふりと絶好の

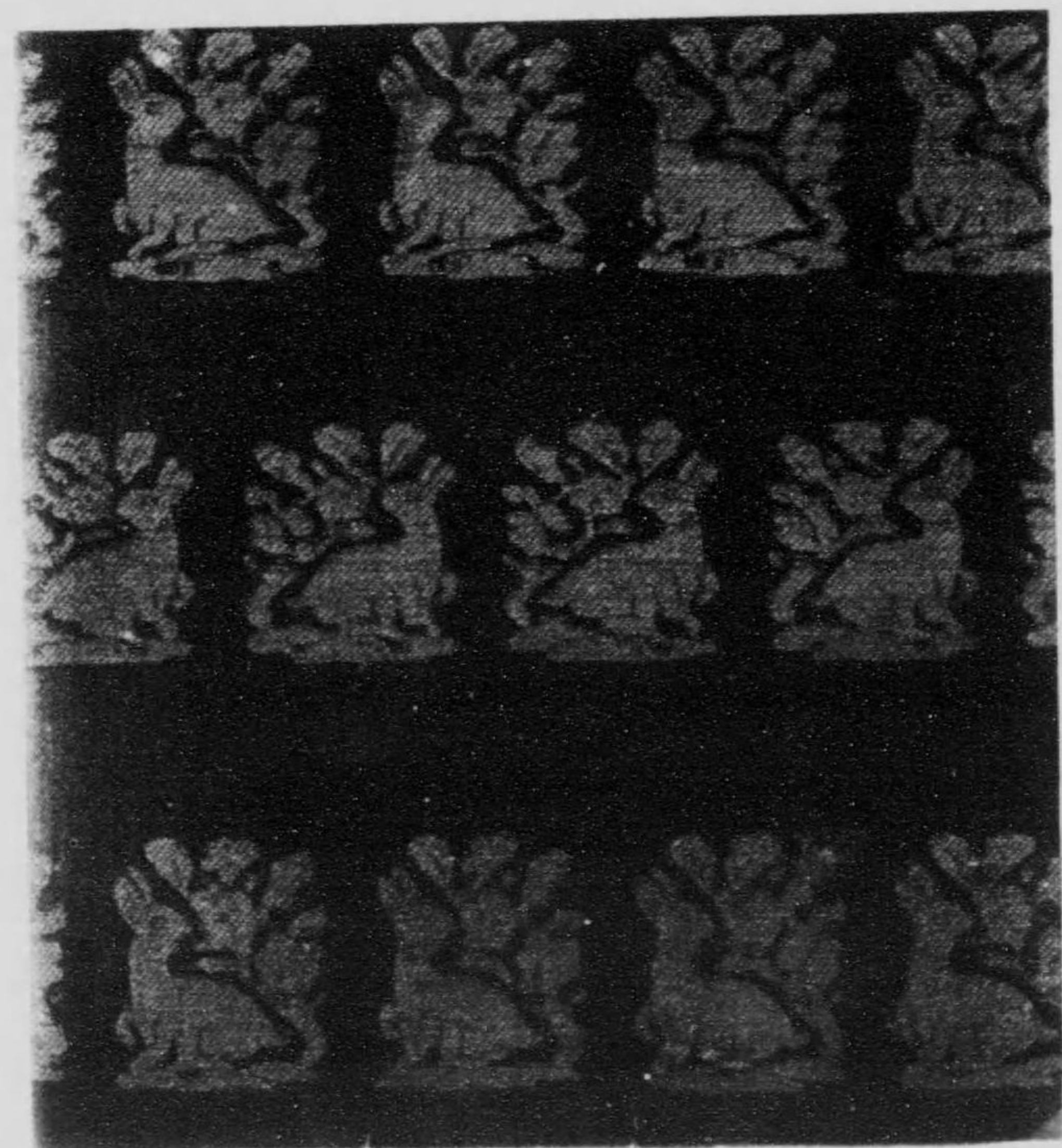
大正戊午中秋
 利休十二世 千宗守 矣

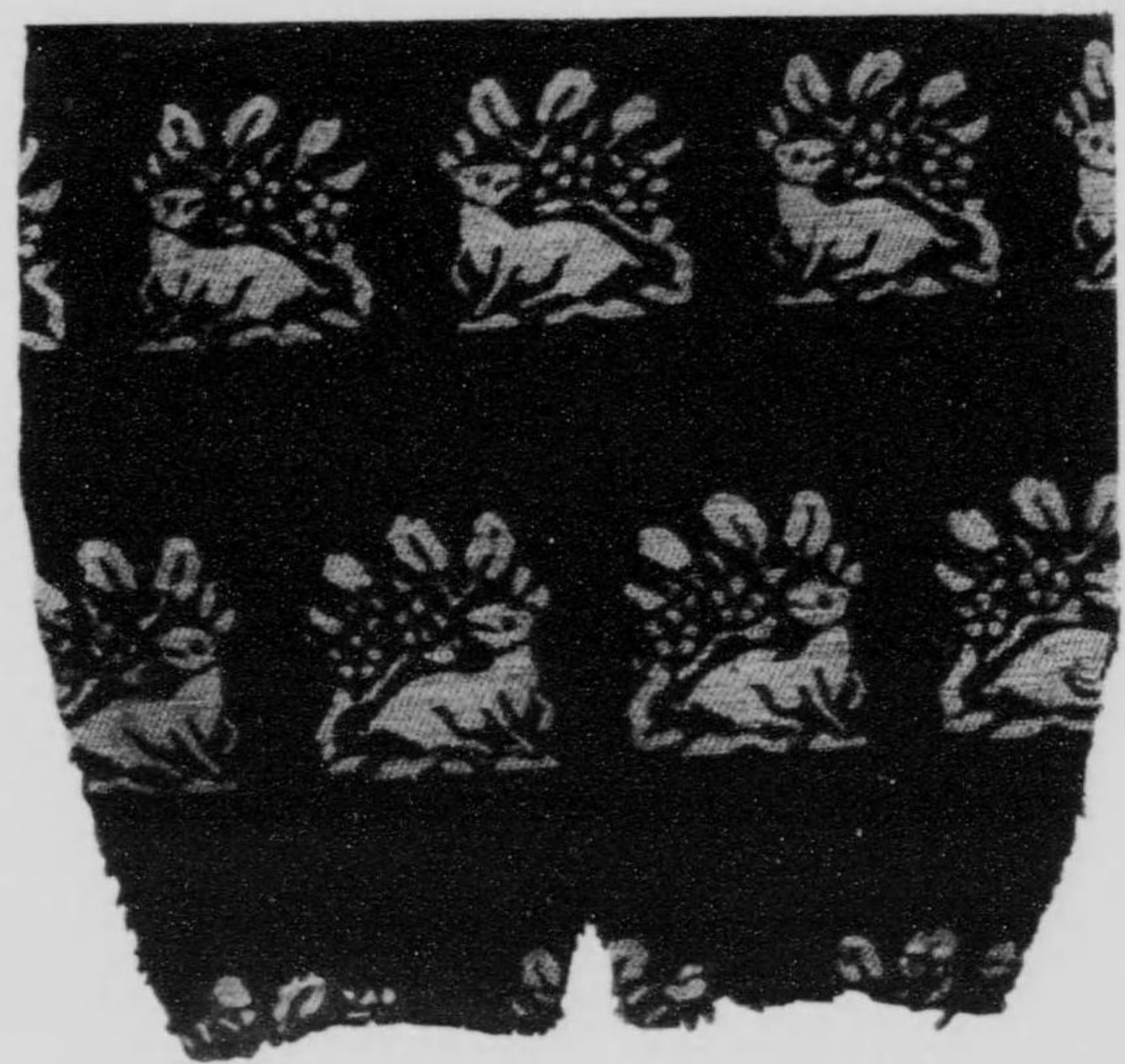


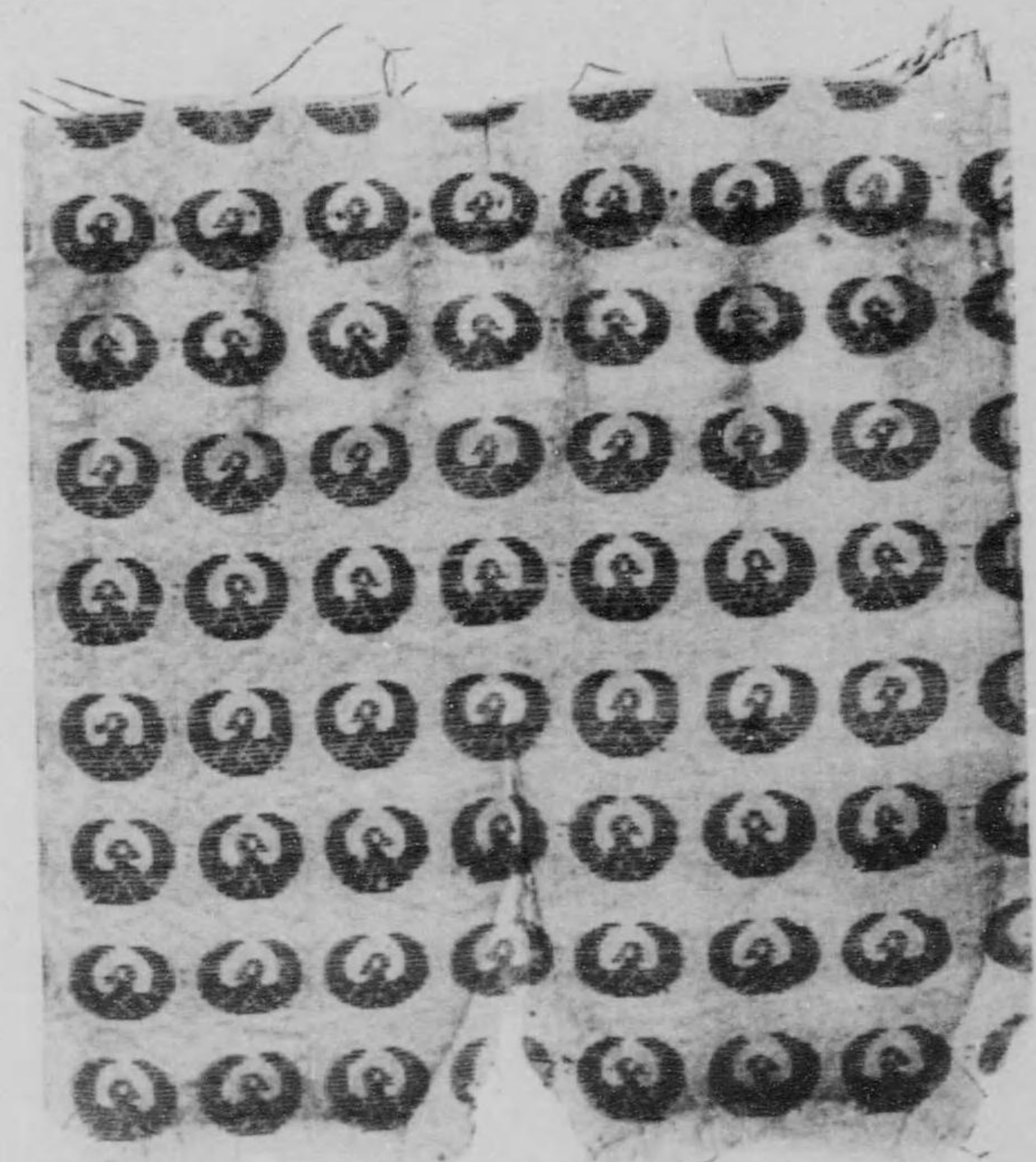


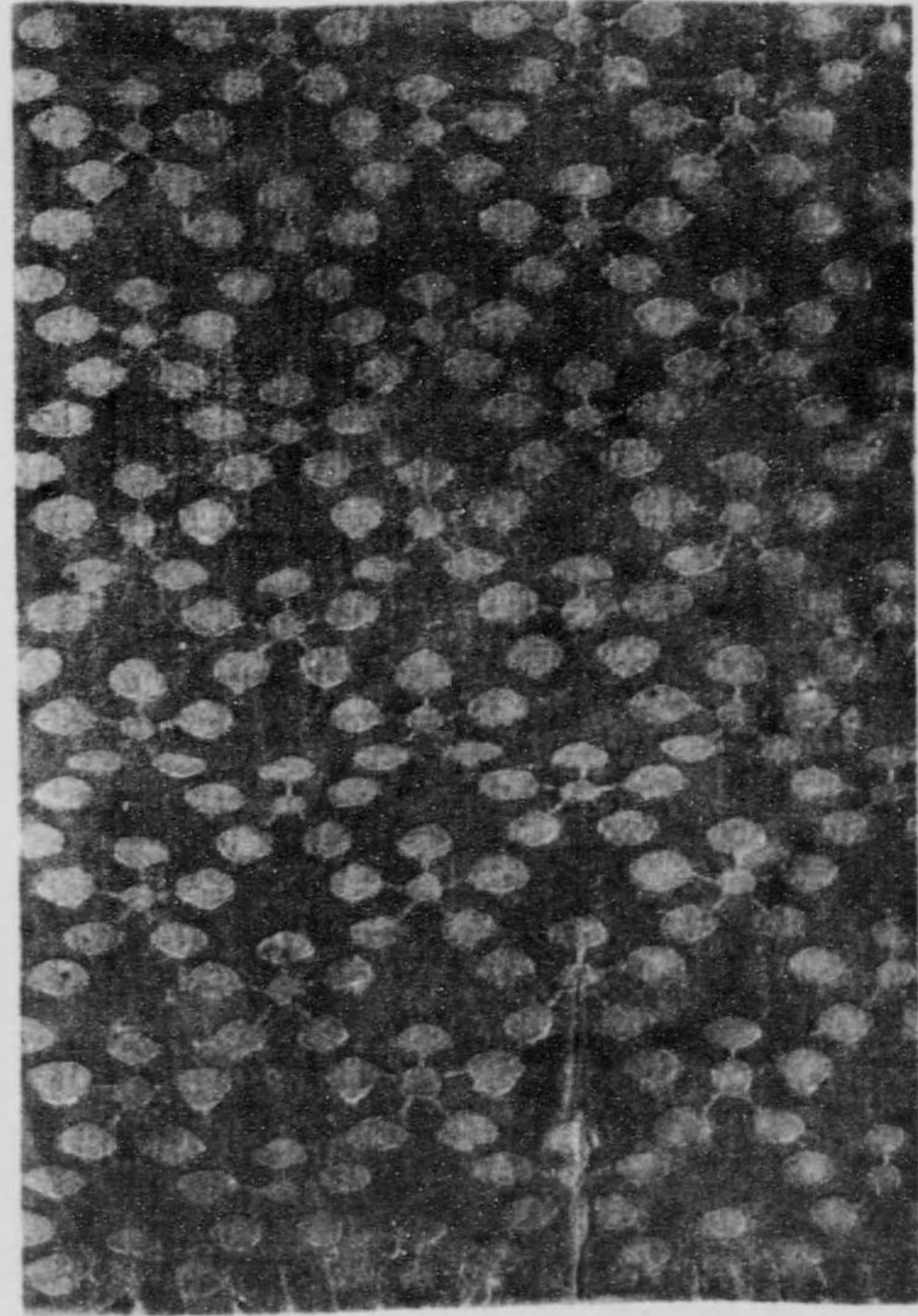


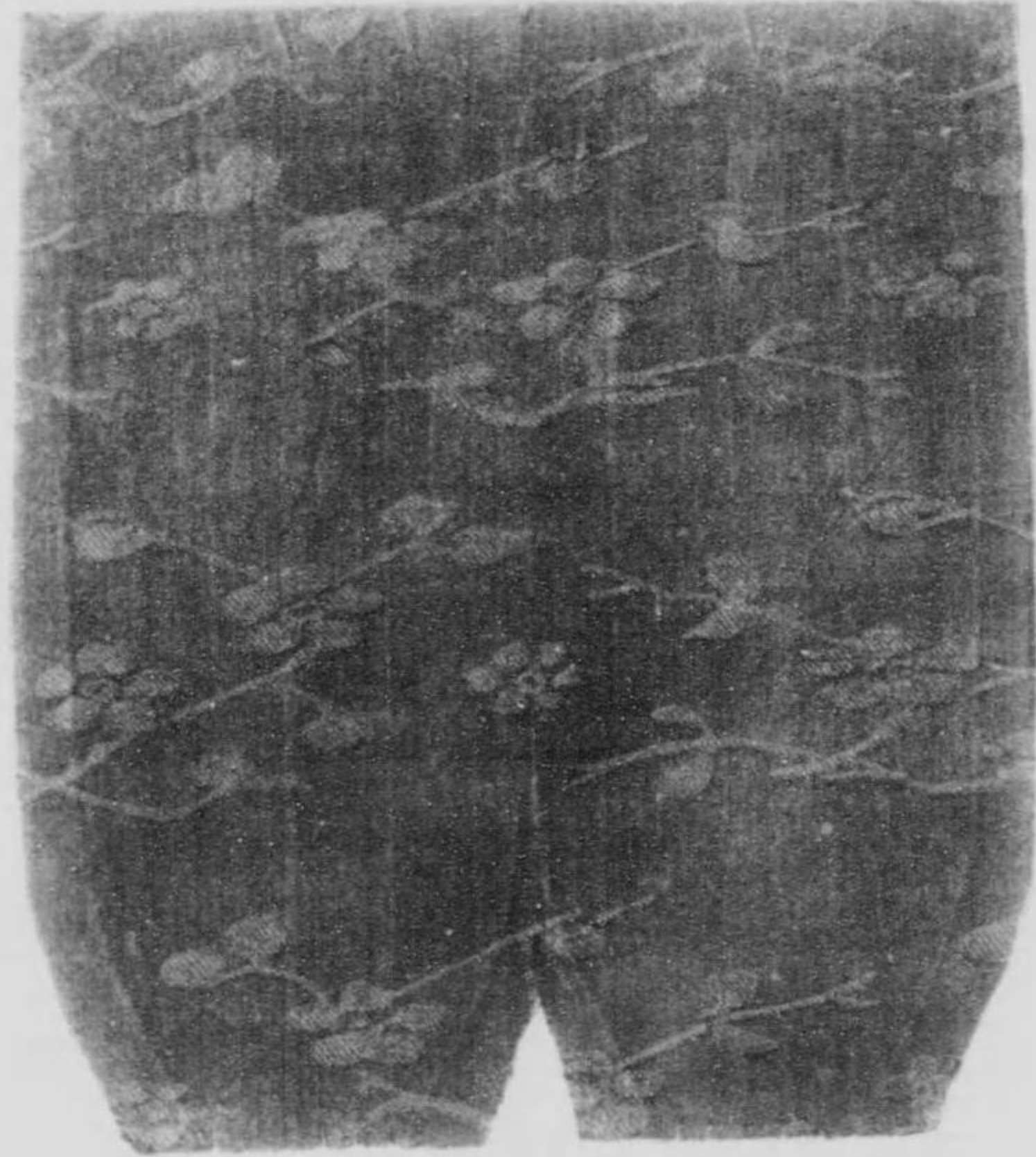


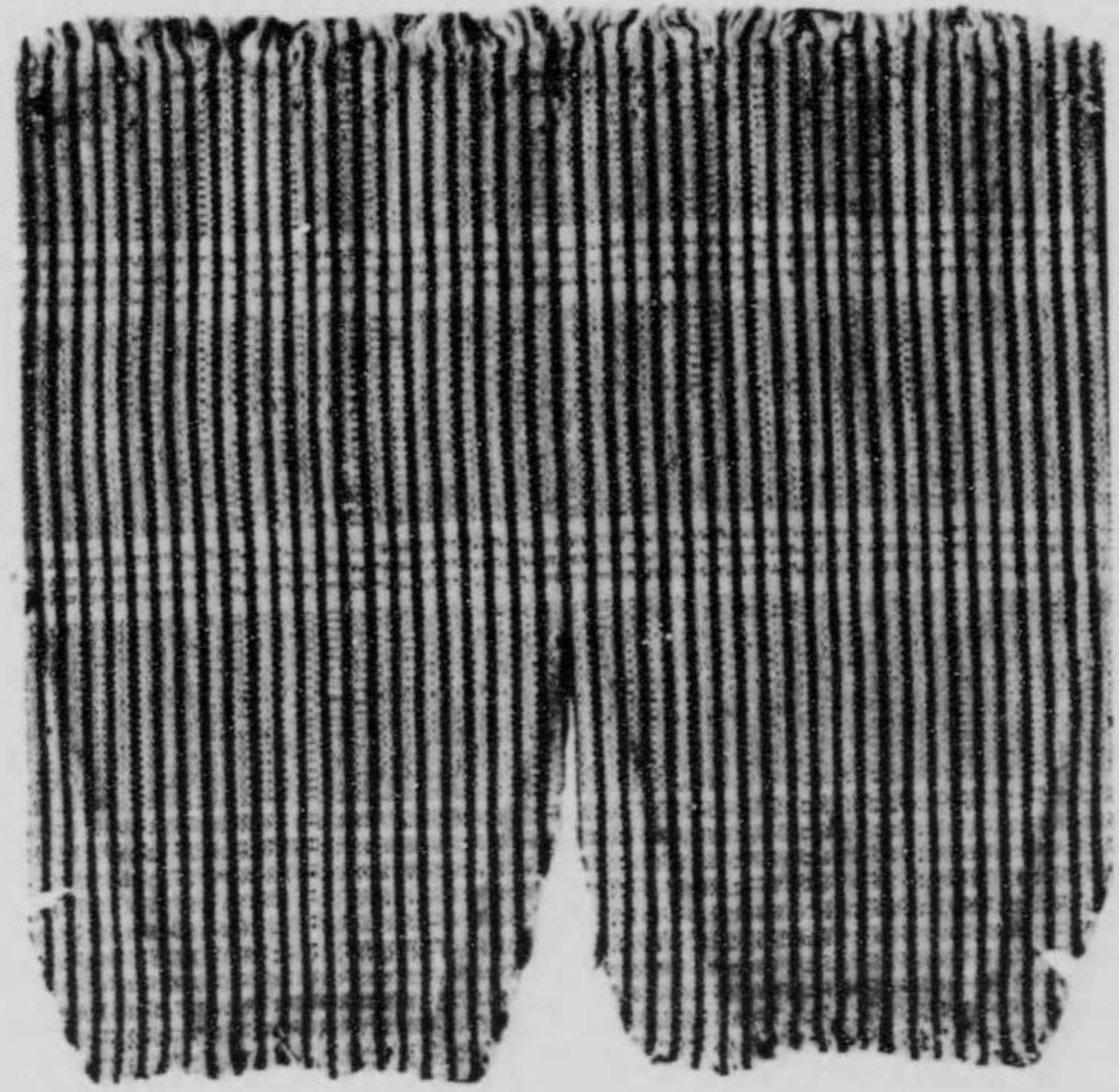


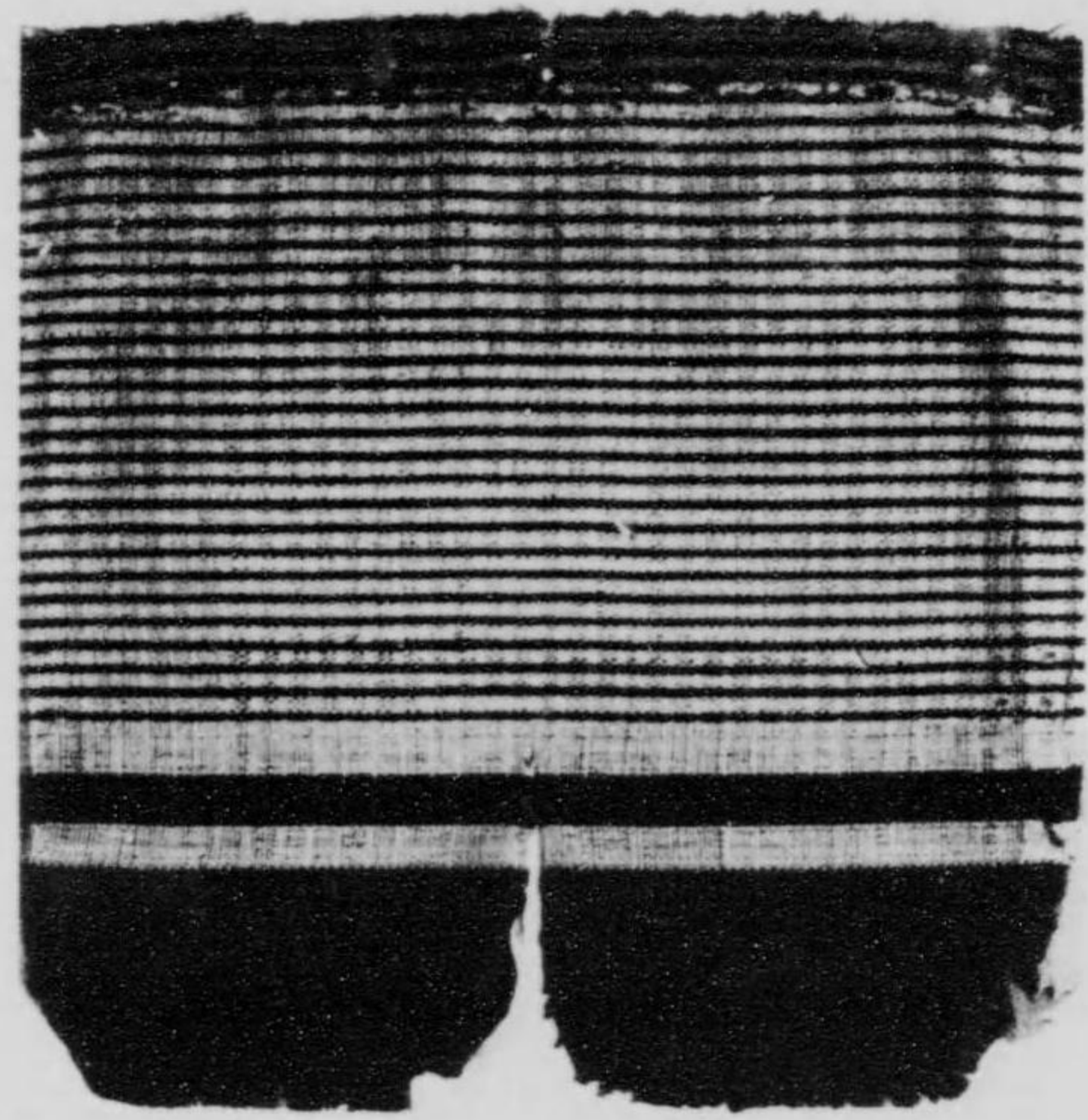














418
57

大正七年十一月三日印刷
大正七年十一月七日發行

〔非賣品〕

◀ 輯一第色の種千 ▶

錄登權作著

編輯兼著作權者	大阪市東區北濱四丁目三十三番地
發行兼著作權者	木津宗一 大阪市東區伏見町三丁目十六番地
印刷兼著作權者	戶田彌七 東京市芝區芝公園十一號地
印刷所	川上邦基 東京市下谷區中根岸町七十八番地
發行所	光琳社寫眞印刷部 大阪市東區北濱四丁目三十三番地
頒布元	官友會 東京市芝區芝公園十一號地
	光琳社

○本書收輯の圖樣を應用せらるゝ際は必ず著作權者に應へらるべし

終